

## ◇追憶！ 農家主体の小さな部落に住んで

大槻伸次

50余年前のこと、縁あって市の中で尻から2番目で農家が主体の極小部落に新居を構えたが、そこは全くの片田舎で周辺は見渡す限り畠と水田で、赤城山の裾野が丸見えのところだった。そして家敷の裏の素掘りの農業用水路は、小魚が群れを成していた。周辺の田圃では時々「イタチ」がキヨトンと顔をだし、屋敷前の梅林は「野兎」がピヨンピヨンと駆け回り追い掛け回したこと也有った。それを知った両親から、そんなところに住んで大丈夫かと心配されたこと也有った。そこで、なぜわざわざこんな片田舎を選んだかというと将来趣味のアマチュア無線をやる為、周辺に障害物が無くてアンテナを設置するのに都合が良く広い屋敷が必要と考えたからである。他にオーディオも趣味だったので、クラシック音楽を大音量で聞きたいというのもあった。

購入した土地は水田だった為農地転用の許可をとり、縁あって尾島のヤマトイモ畠の土をダンプ40台で運び埋め立てた。そこで、しばらくの間ヤマトイモがあちこち生えてきた（現在もその名残が生えてくる）。そして購入から半年くらい経った頃、突然不動産屋さんが様子伺いに来てくれた。その茶飲み話によると、この近辺の広大な水田一帯が埋め立てられ大住宅団地が造成されると打ち明けられた。そこで不動産屋さんからこの土地を安く売ってしまったと嘆き節が聞かれた。

住いは先輩の父親が大工さんをしていたのでお願いした。そこでいよいよ棟上げとなったら、何処で耳にしたのか区長さんという方が日本酒の一升瓶を下げてきてくれたから田舎はお堅いなと思った。ところが、家が完成したら離れてはいるが隣組となる人たちを大勢呼んでお茶飲み会をするのが慣わしだと聞き、宴席の準備に大忙になった。そして、年初から勇躍住み始めたら赤城風の直撃を受けその寒さに震えあがった。そして2か月もしたら新年度となり釜番という神社等の世話人役も回って来た。

釜番の相手は一世代も上の人達で、村の伝行事や各家庭を回っての神社のお札配りなどしたが、そこで驚いたのはどの農家も古い造りで、玄関を開けるとそこは広い土間で、土焼きの大きな火鉢が置いてあり「鉄瓶」がかけられて懐かしさを感じた。

ところが、この頃の日本は高度成長期で、何処の農家も古い家を壊して新しく建て替える家が続出しが、古い家を取り壊すのに村の全戸で手伝いをするのが習わしと云われ、真っ黒になって一日が終わった。そして、住人となってしばらくすると、村の誰々さん（どんな方が全くわからい）が亡くなったと知らせがあって、その日のうちに顔出しに行くのが習慣と云われた。私が出勤の日は妻が代行することもあったが、世帯主が行くのがベストだったようだ。また、当時は村人が亡くなると自宅葬の為、全戸でお葬式（ジャンボン）の準備をすると云われ3日間動員された。そこで、当然のこととして会社を休まなければならなかから、毎月のように亡くなる方がいたこと也有て休暇が取りにくく困ったことがあった。隣組の仲間は勤務先で、また誰かを殺して休暇を取るのかと嫌味を言われたことがあったとか聞いたことがあった。

お葬式の準備は手分けで行い、亡くなった方の家の親戚の知らせ（当時は電話が普及していなかった。）と坊さんとの打ち合わせや送り迎え、寺の葬儀用具の取り揃え、竹細工、（使い捨ての箸や葬列時の持ち物、墓に備える飾りもの。）土葬墓地の穴掘りだった。他に、女性たちは食事の支度等が有って、あちこちツケで食材の買い出しを頼まれた。（豆腐屋が多かった。）その葬式を取り仕切るのは葬儀委員長だったが、村に長く住んでいる人達は、そちらの中で選んだようだが、私が住む新開地は新参者ばかりだったので、私に（新開地の古参）2度葬儀委員長が回って来た。ところが、手違いで寺世話人への連絡がちょっと遅れたことがあって、こっぴどく怒られた。

お葬式当日は、自宅に設えられた葬祭壇の前で坊さんの読経が行われ焼香が終わった後、埋葬の為菩提寺に向かうのに葬列（野辺送り）が組まれた。葬列の順序は道案内として高張提灯を持った人が先導し、続いて花籠（道中小銭を振りまく）、弔旗、花輪、紙製の蓮華花、枕飯、香炉、その他もろもろと続くが、お膳持ちは故人の妻や子供、続いて僧侶、位牌持ち、天蓋持ち続いて棺が最後となる（詳細は忘れた）。菩提寺に着くとシンバルの様な「ミョウハチ」をジャンボンと鳴らしながら左回りに3度？回って埋葬する墓地に運ばれるが、この時花籠の小銭が撒かれるので、この時とばかりに待機していた子どもたちが群がって拾い集めた。

埋葬が終わって供養の席が設けられるが、墓地の穴掘り役だったときは最上

席に座らせられ接待されたが、落ち着かなかった。

その他、隣組長になったとき、村の古参に納涼祭の会計を押し付けられたが、終わった後役員だけで外へ飲み食いに行くというのがあって、その会計処理は任せると云われた。ところが、どこから何の名目で支出しようかと一人で思案し苦労した。

また、村では集会があると必ず議論が伯仲？するからどうしてかなと思ったら、晩酌をやってから来ると聞いた。そこで、また会議が荒れるのかと思うと出席するのが億劫になったことが度々あった。

他に、新年度になると道普請や用水路の補修工事や堀浚いに動員された。道普請とは道路の砂利敷やでこぼこ道の補修などで、用水路の補修工事は土手が崩れたところに松杭を打ち甲羅板をあてがって土留め作業をしたが、次の日まで疲れが残った。

他に極小部落であった為、体育協会主催の野球やソフトボール大会は否応なく参加を求められ、運動会は次々と競技に駆り出された。

現在は、区を取り巻く環境と区内の世代交代が進んで状況が一変し、全てが簡素化されほつとされているが（簡素化も程度問題だろうが）、唯一用水路の堀浚いは今でも実施され出席しないと出不足料をとられるのは変わらない。

当時（50余年前）、何も知らず考えず農家主体の超田舎に居を構えてしまったが、いろんな伝統的な習慣があって溶け込むのに難儀し住むのに嫌気がさしたこともあった。なかでも驚いたのは住み始めて2か月早々で、村の世話番役である釜番が回って来て驚いたが、そのお陰で村の様子が早く理解できたというはある。また、極小部落であったから区長をはじめとして全ての役職が回って来て、それが更に発展して区域の役員や市の団体役員も経験することになったのは私の人生に於いて大いにプラスになった。また、周辺の環境も大きく変化し、住み始めた当時は田圃の中の一軒家という感じだったが、その数年後隣近所となる家や直近に大きな住宅団地が造成され、スーパーやホームセンター、複数の医院も開業しすごく便利になった。更に我が家から50mほどの所に中学校が移転され、小学校も直線道路先600m程だったので子どもたちの通学に至極便利だった。最近では、直ぐ隣に高規格の幹線道路が開通し、ここへ来た当時から比べると想像できない変わりようで、先見の目があったのかな？と自問している。（2022/8/23記）